

人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究(その3)

A Longitudinal Study of the Adaptive Processes of Students in the Department of Human Environmental Studies (III)

石崎 保明・坂本 剛・高橋 陽子・内藤 徹・中川 直志

ISHIZAKI Yasuaki, SAKAMOTO Go, TAKAHASHI Yoko, NAITO Toru, NAKAGAWA Naoshi

Abstract: The purpose of this research is to investigate the adaptive processes of the students in the Department of Human Environmental Studies at Nagoya Sangyo University. Our main target of this paper is transition in consciousness of the students between second to third grades.

Major findings were as follows: (1) understanding for the three study fields composed of the Area of Environmental Psychology has been integrated; (2) various recognition to “environment” becomes apparent at third grade; (3) the needs for English has been recognized again through job hunting.

Keywords: human environment, environmental psychology, adaptive processes, international sensibility

0. はじめに⁽¹⁾

本研究の目的は、名古屋産業大学人間環境マネジメント学科に所属する学生の入学後の適応過程を縦断的に調査し、その調査を通じて人間環境という学際的領域のあるべき方向性を模索し、同時に教育へフィードバックしていくことである（内藤・中川・石崎・坂本・高橋、2005；中川・石崎・坂本・高橋・内藤、2006）。これまでの調査は、第1回が2004年9月から10月にかけて同学科のI期生を対象に実施され、その後、第2回2005年4月、第3回2005年9月、第4回2006年4月、第5回2006年10月とI・II期生を対象に行われている。本稿では主に第4回までのデータをもとに考察を行ったものである（3節、4節においては第5回まで）。第1回、第2回を中心とした考察については上記先行報告を適宜参照いただきたい。

本稿は、本節および5節を内藤と坂本が担当した。第1節は人間環境全般について中川が担当し、第2節では環境心理領域のイメージや就職感について石崎が担当している。第3節は坂本が学生生活の適応について、第4節では高橋が国際性に関する考察を行っている。全体は、本研究の総括は内藤を含めた領域スタッフ全員で調査結果や分析の検討を経てまとめられている。本節および5節を除き、各節に対する執筆担当者は内藤ら（2005）のそれと同じであり、編集上、各節の執筆においては執筆者の意向を最大限に尊重している点もそれと変わっていないことを断っておく。

0 節引用文献

- 中川直志・石崎保明・坂本剛・高橋陽子・内藤徹 2006
人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究(その2),
環境経営研究所年報, 5, 1-30.
- 内藤徹・中川直志・石崎保明・坂本剛・高橋陽子 2005
人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究, 名古屋
産業大学論集, 7, 67-77.

1. 人間環境に対する認識について⁽²⁾

1.1. 調査結果

1.1.1. 概要

本節においては、2005年後期と2006年前期に行った人間環境に対する認識に関するアンケートの調査結果について報告すると共に、それらを前回（2005年前期）と初回（2004年後期）の調査結果⁽²⁾と比較することによって、人間環境あるいは本学人間環境系学科に対する学生の認識の変化について考察する。

本節で取り上げる調査は本学人間環境マネジメント学科I期生を対象としたものである⁽³⁾が、通時的変化に重点を置く立場から、分析に当たっては全回答者の中からそれ以前の全調査に回答した学生のデータのみを抽出し処理した。この手法については前回報告⁽⁴⁾においても採用したものであり、本研究の報告を初回から通読頂く読者の便宜に照らしても簡単

に変更できない一線であるが、今回報告する2回分の調査については、それまでの全調査に参加していた学生数が激減してしまい⁶⁾、その分だけ統計結果から読み取れることに限りがある。従って全統計結果の提示は2006年度前期の統計結果のみとし、それ以外については必要に応じ提示することとする。また、2006年度前期の回答者のデータにも必要に応じ提示、言及する。⁶⁾ アンケート回収率の低さの意味については前回の報告で若干ではあるが述べたので今回は割愛させて頂くが、次回報告以降ではデータの処理において異なる手法が採られる可能性があることを示唆しておく。

今回の分析で特に留意すべきこととして、I期生が専門課程に進んだという事実がある。発見された数少ない有意なデータの変化の中に、その影響を窺わせる、これまでになかった傾向も散見される。以下の議論ではこれらを中心に議論していく。

1.1.2. 2006年度前期調査結果（I期生, 2004年度後期・2005年度前・後期提出者データ）

2006年度前期調査に回答したI期生29名の内、それ以前の全調査に回答していた学生8名の回答結果は以下の通りである。なお、表中の回答数の合計は必ずしも回答者数（あるいはその倍数、等）と一致しない。これは設問や選択肢によって無回答や複数回答が見られたためである。当然のことながら、無回答をデータに含めることはできない。しかし、複数回答を想定していない設問での複数回答（第一選択で複数の選択肢を回答する、等）についてはそれを積極的意思表示とみなし、データに算入している。

表 1-1 2006 年前期調査結果（I 期生, 2004 年度後期・2005 年度前・後期提出者データ）

質問	A-1								
	「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか。(自由回答)								
	自然環境	インフラ	生活環境	家庭環境	人間関係	周囲	文化	その他	
選択数	3	0	3	2	2	0	1	4	
%	20.00	0.00	20.00	13.33	13.33	0.00	6.67	26.67	

*生活環境には建築としての家、社会環境を含む

質問	A-2									
	人間環境の例として思い浮かぶものを2つ以上挙げてください。(自由回答)									
	対人関係、心理	会社	政治	文化・歴史	生活環境	社会インフラ	家族	学校	自然環境	言語
選択数	4	0	0	0	1	0	2	0	3	1
%	36.36	0.00	0.00	0.00	9.09	0.00	18.18	0.00	27.27	9.09

質問	A-3									
	人間環境分野に分類される学問を2つ以上挙げてください。(自由回答)									
	心理学	環境心理	言語学	文化環境	家庭環境	環境学・自然環境	社会環境	福祉	人間環境学	経営学
選択数	2	0	1	1	1	0	0	0	0	0
%	40.00	0.00	20.00	20.00	20.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究（その3）

	A-4		A-5					
	人間環境について学んでいる、あるいは学んだという実感がありますか。		本学での講義を受講してあなたの人間環境に対するイメージが変わりましたか。		解答パターン（A-4，（A-5）の順			
	(a) ある	(b) ない	(a) はい	(b) いいえ	(a)(a)	(a)(b)	(b)(a)	(b)(b)
選択者数	7	1	5	3	5	2	0	1
%	87.50	12.50	62.50	37.50	62.50	25.00	0.00	12.50

	A-6					
	(学問分野としての) 人間環境分野の中で最も興味ある分野は何ですか。(a)文化環境 (b)心理 (c)家庭環境 (d)言語環境 (e)その他 () (f) 人間環境分野の具体的内容がまだよくわからない。					
	(a)文化環境	(b)心理	(c) 家庭環境	(d)言語環境	(e)その他	(f)不明
選択者数	1	7	5	1	0	0
%	7.14	50.00	35.71	7.14	0.00	0.00

	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください（優先順に）。（第一選択）										
	建設・不動産、	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	0	0	0	0	0	0	0	4	2	1	0
%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	57.14	28.57	14.29	0.00

	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください（優先順に）。（第二選択）										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	0	0	0	0	2	0	1	3	0	0
%	14.29	0.00	0.00	0.00	0.00	28.57	0.00	14.29	42.86	0.00	0.00

	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください（優先順に）。（第一・二選択）										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	0	0	0	0	2	0	5	5	1	0
%	7.14	0.00	0.00	0.00	0.00	14.29	0.00	35.71	35.71	7.14	0.00

A-6、A-7（第一選択）選択パターン														
(a)文 化環 境(a) 建 設・ 不 動 産、	(a)文 化環 境(d) 情 報・ 通 信	(a)文 化環 境(g) 金 融	(a)文 化環 境(h) 医 療・ 福 祉	(a)文 化環 境(i) 教 育	(a)文 化環 境(j) サ ー ビ ス	(b)心 理(a) 建 設・ 不 動 産、	(b)心 理(d) 情 報・ 通 信	(b)心 理(e) 飲 食 業・ 宿 泊	(b)心 理(f) 卸 売・ 小 売	(b)心 理(g) 金 融	(b) 心 理 (h) 医 療・ 福 祉	(b)心 理(i)教 育	(b) 心 理 (j)サ ー ビ ス	(c)家 庭環 境(a) 建 設・ 不 動 産、
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4	2	1	0
0.00	0.00	0.00	9.09	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	36.36	18.18	9.09	0.00

-6、A-7（第一選択）選択パターン													
(c)家庭環境(d)情報・通信	(c)家庭環境(e)飲食・宿泊	(c)家庭環境(h)医療・福祉	(c)家庭環境(i)教育	(c)家庭環境(j)サービス	(d)言語環境(e)飲食・宿泊	(d)言語環境(g)金融	(d)言語環境(h)医療・福祉	(d)言語環境(j)サービス	(e)その他(j)サービス	(e)その他(h)医療・福祉	(f)わからない(a)建設・不動産、	(f)わからない(d)情報・通信	(f)わからない(h)医療・福祉
0	0	3	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
0.00	0.00	27.27	18.18	0.00	0.00	0.00	9.09	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

A-8						A-9				
人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。(a)役に立つと思う (b)どちらかと言えば役に立つと思う (c)どちらでもない(d)どちらかと言えば役に立たないと思う (e)役に立たない						人間環境分野で学ぶ内容に学問的興味を抱きますか。(a)興味を抱く (b)どちらかと言えば興味を抱く (c)どちらでもない (d)どちらかと言えば興味を抱かない (e)興味を抱かない				
	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
選択数	3	3	2	0	0	3	3	2	0	0
%	42.86	42.86	28.57	0.00	0.00	37.50	37.50	25.00	0.00	0.00

A-8,A-9 パターン分析													
(A-8)人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。													
(a)役に立つと思う (b)どちらかと言えば役に立つと思う (c)どちらでもない (d)どちらかと言えば役に立たないと思う (e)役に立たない													
(A-9)人間環境分野で学ぶ内容に学問的興味を抱きますか。													
(a)興味を抱く (b)どちらかと言えば興味を抱く (c)どちらでもない													
(d)どちらかと言えば興味を抱かない (e)興味を抱かない													
(a)(a)	(a)(b)	(a)(c)	(a)(d)	(b)(a)	(b)(b)	(b)(c)	(b)(d)	(c)(a)	(c)(b)	(c)(c)	(c)(d)	(d)(a)	(d)(b)
2	1	0	0	1	2	0	0	0	0	2	0	0	0
25.00	12.50	0.00	0.00	12.50	25.00	0.00	0.00	0.00	0.00	25.00	0.00	0.00	0.00

人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究（その3）

	A-10	
	環境情報ビジネス学科と人間環境マネジメント学科の間にある違い(学修内容やめざす目標のちがいを)を自分なりにイメージできますか。どれか一つに○。	
	(a) はい	(b) いいえ
選択者数	3	5
%	37.50	62.50

	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一選択)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	0	0	0	1	1	0	0	3	1	2	0
%	0.00	0.00	0.00	12.50	12.50	0.00	0.00	37.50	12.50	25.00	0.00

	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第二選択)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	0	0	0	1	2	0	2	2	0	0
%	12.50	0.00	0.00	0.00	12.50	25.00	0.00	25.00	25.00	0.00	0.00

	A-12（第一・第二選択）										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一・第二選択)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	0	0	1	2	2	0	5	3	2	0
%	6.25	0.00	0.00	6.25	12.50	12.50	0.00	31.25	18.75	12.50	0.00

	A-13										
	あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一希望)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	0	0	0	0	0	0	4	0	2	1
%	12.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	50.00	0.00	25.00	12.50

	A-13										
あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。（第二希望）											
	建設・ 不動 産	製造	運輸	情報・ 通信	飲食 業・宿 泊	卸売・ 小売	金融	医療・ 福祉	教育	サービ ス	その他
選択数	0	0	0	1	0	2	0	1	2	1	1
	0.00	0.00	0.00	12.50	0.00	25.00	0.00	12.50	25.00	12.50	12.50

	A-13										
あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。（第一・二希望）											
	建設・ 不動産	製造	運輸	情報・ 通信	飲食 業・宿 泊	卸売・ 小売	金融	医療・ 福祉	教育	サービ ス	その他
選択数	1	0	0	1	0	2	0	5	2	3	2
	6.25	0.00	0.00	6.25	0.00	12.50	0.00	31.25	12.50	18.75	12.50

A-12(第1選択) A-13（第1選択）パターン分析														
A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。（第一選択） A-13 あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。（第一希望）														
(a)建 設・不 動産 (a)建 設・不 動産	(a)建 設・不 動産 (i)教 育	(a)建 設・不 動産 (j)サ ービ ス	(b)製 造(i) 教育	(c)運 輸(a) 建 設・不 動産	(d)情 報・通 信(a) 建 設・不 動産	(d)情 報・通 信(d) 情 報・通 信	(d)情 報・通 信(e) 飲 食 業・宿 泊	(d)情 報・通 信(h) 医 療・福 祉	(d)情 報・通 信(i) 教 育	(d)情 報・通 信(j)サ ー ビ ス	(d)情 報・通 信(k) その 他	(d)情 報・通 信(k)其 他	(f)卸 売・小 売(f) 卸 売・小 売	(g)金 融(a) 建 設・不 動産
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	12.50	0.00	12.50	0.00	0.00

A-12(第1選択) A-13（第1選択）パターン分析														
A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。（第一選択） A-13 あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。（第一希望）														
(g)金 融(g) 金融	(h)医 療・福祉 (a)建 設・不 動産	(h)医 療・福 祉(d) 情 報・通 信	(h)医 療・福 祉(f) 卸 売・小 売	(h)医 療・福 祉(i) 教 育	(h)医 療・福 祉(j) サ ー ビ ス	(h)医 療・福祉 (h)医 療・福祉	(h)医 療・福祉 (k)其 他	(i)教 育(b) 製 造	(i)教 育(c) 運 輸	(i)教 育(e) 飲 食 業・宿 泊	(i)教 育(f) 卸 売・小 売	(i)教 育(i) 教 育	(i)教 育(j) サ ー ビ ス	(i)教 育(k) 其 他
0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
0.00	12.50	0.00	0.00	0.00	0.00	12.50	12.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

A-12(第1選択) A-13 (第1選択) パターン分析						
A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第1選択) A-13 あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第1希望)						
(j)サービス (b)製造	(j)サービス (e)飲食業・ 宿泊	(j)サービス (g)金融	(j)サービス (h)医療・福 祉	(j)サービス (i)教育	(j)サービ ス(j)サービ ス	(j)サービス (k)その他
0	0	0	2	0	1	0
0.00	0.00	0.00	25.00	0.00	12.50	0.00

1.2. 考察

1.2.1. 人間環境に対する認識

質問 A-1（「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか）においては注目に値する可能性のある変化が読み取れる。2005 年度前期において 63.54%に上った自然

環境の選択率が 2006 年度前期⁷⁾では 20.00%にまで低下した一方で、それ以外の選択肢が同様に選択率を上げ、選択率の（ある程度の）平準化が進んでいる。これは 2006 年前期全回答者(29 名)のデータにも見られる傾向（自然環境の選択率 34.88%, 生活環境の選択率 20.93%）でもある。

表 1-2 2006 年前期調査結果(質問 A-1)（I 期生全回答者）

質問	A-1							
	「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか。(自由回答)							
	自然環境	インフラ	生活環境	家庭環境	人間関係	周囲	文化	その他
選択数	15	0	9	3	5	3	1	7
	34.88	0.00	20.93	6.98	11.63	6.98	2.33	16.28

*生活環境には建築としての家、社会環境を含む

これを専門課程への移行と関連付けることは不合理ではないだろう。というのも、2005 年度後期の回答状況を見ると自然

環境の優位(52.63%)に大きな変化が見られないからである。

表 1-3 2005 年度後期 調査結果(質問 A-1)(I 期生, 2004 年度後期・2005 年度前期提出者データ)

質問	A-1								
	「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか。(自由回答)								
	自然環境	インフラ	生活環境	家庭環境	人間関係	周囲	文化	その他	
選択数	10	0	2	0	4	1	1	1	
	52.63	0.00	10.53	0.00	21.05	5.26	5.26	5.26	

*生活環境には建築としての家、社会環境を含む

2005 年度から 2006 年度にかけて I 期生は専門課程に移行し、環境の多様性についての認識を深めたとも受け取れる。また、ここで「環境」と述べた点も重要であり、質問 A-2(人間環境の例として思い浮かぶものを 2 つ以上挙げてください。)に対する回答結果に 2005 年度前期以降大きな変化が観察されないことから、A-1 の結果が「人間環境」に対する認識の変化ではなく、「環境」に対する認識の変化である事がわかる。「人間環境に対する多様な認識」が「環境に対する多様

な認識」にまで昇華された結果であると好意的に受け止めた

い。学生の認識の多様化、それに対する「専門課程への移行」⁸⁾の影響は A-3 から A-5 の回答結果にも窺える。心理系への一定の傾倒は相変わらずであるが、2006 年前期全回答者のデータに見られるように、選択の多様化が若干ではあるが進んでいるようにも見える。

表 1-4 2006 年前期調査結果(質問 A-3)（I 期生全回答者）

質問	A-3									
	人間環境分野に分類される学問を 2 つ以上挙げてください。（自由回答）									
	心理学	環境心理	言語学	文化環境	家庭環境	環境学・自然環境	社会環境	福祉	人間環境学	経営学
選択数	9	7	2	2	4	0	1	2	0	0
	33.33	25.93	7.41	7.41	14.81	0.00	3.70	7.41	0.00	0.00

さらに、質問 A-4（人間環境について学んでいる、あるいは学んだという実感がありますか。）については、2006 年前期において「実感がある」と答えた学生の割合が急上昇し、専門課程に入って相応の刺激を受けたことを窺わせている。また

2006 年前期全回答者のデータを見ると、質問 A-5（本学での講義を受講してあなたの人間環境に対するイメージが変わりましたか。）において、「はい」と答えた学生の割合が高くなっている(72.41%)。

表 1-5 2006 年前期調査結果(質問 A-4,5)（I 期生全回答者）

	A-4		A-5		解答パターン（A-4, (A-5) の順			
	人間環境について学んでいる、あるいは学んだという実感がありますか。		本学での講義を受講してあなたの人間環境に対するイメージが変わりましたか。					
	(a) ある	(b) ない	(a) はい	(b) いいえ	(a)(a)	(a)(b)	(b)(a)	(b)(b)
選択者数	26	4	21	8	19	5	2	3
%	86.67	13.33	72.41	27.59	65.52	17.24	6.90	10.34

人間環境について学んだ」という実感と「人間環境に対するイメージの変化」には相関関係がありそうであり、それらに対する肯定的な回答の上昇と学生の認識の多様化の相関関係も想像に難くない。一つの問題はこのような意識の変革が入学して 2 年後に現れていることであり、今後その肯定的側面と否定的側面を洗い出してみる必要がある。

1.2.2 「環境に対する多様な認識」と「人間環境に対する一体化された認識」

一方で、前節での考察と質問 A-10（環境情報ビジネス学科と人間環境マネジメント学科の間にある違い(学修内容やめざす目標のちがいを自分なりにイメージできますか。)の回答結果が意味することについても検討しておく必要がある。質問 A-10 においては、2005 年度前期に「はい」と回答した学生の割合がそれ以前の 20.00%から 40%台にまで上昇した（前回報告参照）ものの、それ以降ほとんど変化が見られない。これは専門課程に移行した後も、「人間環境に対する一体化された認識」が醸成されなかったことを意味している。つまり、前節で指摘した「環境に対する認識の多様化」、さ

らに「人間環境について学んでいるという実感の高まり」や「人間環境に対するイメージの変化」も、自らが人間環境系学科に所属しているという事実以外には根拠に乏しいことになる。むしろこれでは、「人間環境学科生の環境情報学科生化」とも受け取られかねない。もちろん、この事自体必ずしも否定されるべきでないかもしれないし、また、「人間環境」という言葉の曖昧性からして、「人間環境系学生」に固有の「興味の範囲」や「職業の範囲」(1.2.3 節参照)といったものは存在しないのかもしれないが、個々の人間環境系学科において学問上のアイデンティティ(学問体系)があるのかないのか、あるならばそれはどのようなものなのか、ないならばそれはなぜなのか(学際的に学ぶことの意義・本質、等)を学生(あるいは高校生)に対して明らかにする必要があるだろう。特に「掴み所のない」ものを敢えて学ばせている場合、その意義を知らないままでは学んだ事までが虚しいものになることは、誰もがわかっていることとは知りながら、敢えて付言しておきたい。なぜならこれは現実の問題としてこれまでも直面してきたことだからである。

1.2.3. 人間環境からの職業観

質問 A-6(学問分野としての) 人間環境分野の中で最も興味ある分野は何ですか。)における全般的傾向(心理及び家庭環境への傾倒)については、2005 年度後期調査においても 2006 年度前期調査においても特段の変化は感じられなかった。また、質問 A-6 と質問 A-7(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を 2 つ挙げてください。)の相関関係(心理に興味ある学生の、就職における医療・教育分野へのへの関心の高さ)も相変わらずである。環境に対する認識は多様化してきているものの、自らの興味・関心については、専門課程移行の段階(あるいは、入学時を含むそれ以前の段階)でおよそ固まっていると考えられる。興味・関心に変化がない事はそれだけで否定されるべきものではない。しかし、「環境への認識の多様化」を生んだ「専門課程の刺激」が「人間環境系学生としての希望職種が多様化」を引き起こすまでのものではなかったとは言えるだろう。これは前節で述べた「人間環境に対する一体化された認識の欠如」とも無関係ではない。「(狭義の) 心理」=「人間環境」という図式は容易に想像できるが、「(狭義の) 心理以外」=「人間環境」という図式は、学習内容の本質を通じて人間環境を学んでいるという実感がなく、前者の図式よりも

強烈に意識されることはない。それでは人間環境系学生としての職業観にまで影響するのは難しいと思われる。深い自省の念と共に受け止めたい。

質問 A-8(人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。)と質問 A-9 (人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。)においては特筆すべき変化は見られなかったが、学生の興味と「就職に役立つかどうかの判断」に密接な関係があることには改めて注意を喚起しておく必要がある。

質問 A-12 (本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を 2 つ挙げてください。)と質問 A-13 (あなたの就職希望分野について 2 つ挙げてください。)は本学の指向性に対して学生が持っているイメージと学生自身の指向性が一致するのかどうかを問うものである。前回報告において、人間環境の学問内容に対する認識と職業観が噛み合っている学生が、医療・福祉の分野でははっきりしてきたと述べたが、2005 年度後期と 2006 年度前期のデータではサンプル数が少ないため、同様の傾向を明確に読み取することは難しい。しかし、2006 年度前期全回答者データでは、分野全般にわたって人間環境の学問内容に対する認識と職業観が噛み合ってきているようにも見える。

表 1-6 2006 年前期調査結果(質問 A-12,13 回答パターン) (I 期生全回答者)

A-12(第1選択) A-13 (第1選択) パターン分析														
A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を 2 つ挙げてください。(第一選択)														
A-13 あなたの就職希望分野について 2 つ挙げてください。(第一希望)														
(g)金融(g)金融	(h)医療・福祉(a)建設・不動産	(h)医療・福祉(d)情報・通信	(h)医療・福祉(f)卸売・小売	(h)医療・福祉(i)教育	(h)医療・福祉(j)サービス	(h)医療・福祉(h)医療・福祉	(h)医療・福祉(k)その他	(i)教育(b)製造	(i)教育(c)運輸	(i)教育(e)飲食・宿泊	(i)教育(f)卸売・小売	(i)教育(i)教育	(i)教育(j)サービス	(i)教育(k)その他
2	1	0	1	1	1	2	2	0	0	0	0	1	0	0
7.14	3.57	0.00	3.57	3.57	3.57	7.14	7.14	0.00	0.00	0.00	0.00	3.57	0.00	0.00

これも専門課程への移行と無関係ではないだろう。一般に専門課程に進んだ学生は自分の研究と就職を有機的に結びつけようとする傾向が見られるからである。人間環境学科の本質をどの程度理解しているのかは別としても、自分が人間環境学科で研究している内容が人間環境の学問であろうことにあえて疑問を差し挟む理由はなく、自分が行っている研究分野が「人間環境にふさわしい分野」となっても不思議はない。すると、「就職」と「自分の研究分野」と「人間環境にふさわしい分野」の一致も容易に想像できる。

1.3. 「人間環境」アンケートを通じて

本節では 2005 年度後期の回答結果と 2006 年度前期の回答結果に見られる「専門課程への移行」の影響について考察してきた。人間環境に対する認識の多様化は必ずしも人間環境に対する深い理解を示すものではなかったが、それでも多様な認識自体は望ましいあり方と言っていいたいだろう。問題はこの多様化が専門課程への移行後に起こっていることである。本来的には人間環境に対する多様な認識を蓄積した上で、専門ゼミを選択すべきなのであり、そのためにオムニバス講義も

複数用意している。それでも不十分というのであれば、多様性に富む1年次教育、或いは教養教育のさらなる充実は不可避である。

人間環境に対するイメージが確立できていない学生が多い事について言えば、これは単に人間環境のイメージを「教えられていない」ことが問題なのではなく、掴み所のない人間環境という概念に対して自分なりのイメージを形成できない、あるいはそうしようとする意思すら感じられないことが問われるべきである。自律的かつ論理的思考により自分なりの見識（本節の場合人間環境に対する見識）を持つ姿勢が少なくとも人文系の人間環境研究において決定的に重要であることは、いくら強調してもし過ぎることはない。そしてそのような姿勢を身につけるためにも、（専門の授業を含めた）教養（を養う）教育の役割は重要である。単に多様な内容を盛り込むだけではなく、前回報告で述べた通り、「広く人文学的素養・関心（特に、抽象的かつ論理的思考能力）の醸成に努める必要がある」と思われる。

職業観と自分の研究の間の一致関係が強まることはある意味当然の流れであり、それは人間環境という学問に対する認識にも一定の影響を及ぼしていると思われる。上述の通り、学問に対する認識がその学問に対する深い理解に根ざしていないことには寂しさを覚えずにはいられないが、社会に飛び出す一歩手前まで来ている学生の有様としては否定ばかりもできない。むしろ自省すべきはこちらの側であることを最後に確認しておきたい。

1 節注

- (1) 1 節の執筆は中川が担当した。
- (2) 中川直志・石崎保明・坂本 剛・高橋陽子・内藤 徹 (2006) 「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究（その2）」、『環境経営研究所年報第5号』, 1-30, 名古屋産業大学環境経営研究所
- (3) アンケート調査自体はⅡ期生に対しても行っているが、前回報告と比して特筆すべき変化が見られていないので、紙幅の都合上割愛させて頂く。
- (4) 注(2)に同じ。
- (5) 2005 年後期 11 名、2006 年前期 8 名。
- (6) 以下において、「2006 年度前期（の）全回答者データ」を示唆する言及がない限り、言及されるデータは全て「それまでの全調査に参加していた学生のみ」のデータを指す。
- (7) 注(6)参照
- (8) 専門導入課程の教育の影響と見る事もできるかもしれないが、この点についての分析は今後の課題とする。

2. 環境心理領域に関する調査⁽¹⁾

2.1. 考察の目的と対象

2 節では、2004 年度入学生で現 3 年生となる人間環境マネジメント学科(以下、本学科)Ⅰ期生を対象に、2004 年後期、2005 年前期、2005 年後期、および 2006 年前期に実施した計 4 回のアンケート調査結果(以下、それぞれ、Ⅰ(04)後、Ⅰ(05)前、Ⅰ(05)後、Ⅰ(06)前と表記する)を通して、Ⅰ期生が入学して半年後以降の、特に学問領域としての環境心理領域とそれによって描かれる就職観に対する意識の変化を提示し、あわせてその変遷に対して分析を試みる。過去 4 回のアンケート調査における回答者数は表 2-1 のとおりである。

	Ⅰ(04)後	Ⅰ(05)前	Ⅰ(05)後	Ⅰ(06)前
回答者数(名)	51	25	36	30

表 2-1：各アンケート調査の回答者数

ところで、Ⅰ期生の調査から得られた傾向と比較することを目的として本学科のⅡ期生となる現 2 年生に対しても全く同じ項目を用いて調査しているが、本稿ではⅠ期生の結果のみを検討する。また、この一連の調査の回答者はすべて本学科所属の学生であるが、そのすべてが本節で対象としている環境心理領域(以下、「領域」とよぶ)を専攻しているわけではない。なお、今回の調査対象となる 3 年次前期は専門ゼミが本格的に開始される時期であり、本稿では「領域」内の 3 つのゼミに所属する学生の意識変化の傾向についても、必要に応じて考察する。

2.2.1. 学科内での「領域」に対する関心度

まず本学科における「領域」への学問的関心の推移を見よう。設問 B-1(現時点またはこれから大学で学びたい学問または分野は何ですか。)は、それぞれの調査実施時点で本学科所属学生がどのような学問や分野を学びたいと考えているかを尋ねたものである。この設問では複数回答を認めており、それぞれの調査で得られた回答数は以下のとおりである。

	Ⅰ(04)後	Ⅰ(05)前	Ⅰ(05)後	Ⅰ(06)前
回答数	108	52	71	69

表 2-2：B1 の回答数

すべての回答の中で、「領域」が掲げる内容と関連があると思われる学問または分野のキーワードは以下の通りである。

- (1) 心理(学)(がつくものを含む)、福祉(がつくものを含む)、言語(学)(英語、中国語を含む)、人間関係、カウンセリング、臨床、医療、恋愛、人格
- (1)で示されたキーワードの回答数と、それ以外(例えば「マネジメント」や「文化環境」といった本学科他領域が掲げるキ

ワード、および「歴史」や「自然」といったどの領域のものとも解釈できるような包括的な概念を表すキーワード)の回答数とを比率で表したのが表2-3である。

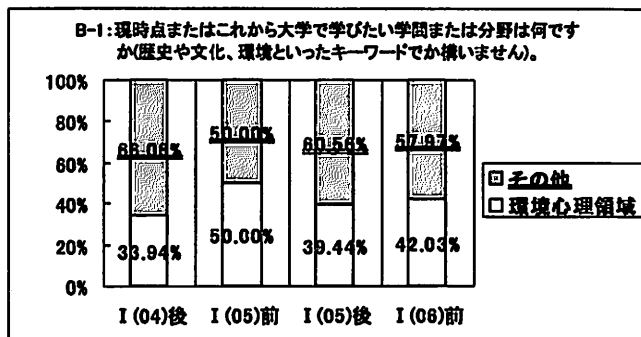


表2-3: 本学科所属学生における「領域」への関心の推移

(1)で示されたキーワードが「領域」を念頭に置いたものであるならば、本学科所属学生の4割程度が本学で「領域」を学びたいと考えており、この水準がI(04)後を除き、維持されている。そしてこの結果は、「領域」に対する学問的な関心を尋ねた設問B-7(「領域」で学ぶ内容に対して学問的な関心を抱きますか。)(の結果とも呼応する。

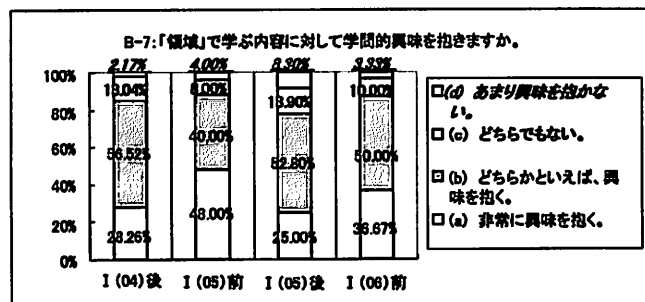


表2-4: 「領域」への学問的関心

以上の結果から、回答者の約8割が「領域」について学問的に関心があり、そのうちの約4割が、大学でも学びたいと考えている状況が浮かび上がってくる。

ところで、表2-4が示す興味深い結果として、I(05)前からI(05)後にかけて「非常に興味がある」と答えた学生がほぼ半減する一方、I(06)前になって前回比で1割程度持ち直しているという事実を指摘することができよう。この結果は、本学科におけるカリキュラム編成とも関連していると考えられる。本学科では、1年次後期に開講されるオムニバス形式の環境心理概論を除き、専門教育科目はすべて3年次より履修可能となっており、卒業要件を満たすために2年次までに基礎教育科目(卒業要件20単位以上)と、環境系・情報系・ビジネス系からなる専門基礎教育科目(卒業要件10単位以上)の受講する学生が多い。1年次から基礎教育科目で着実に「領域」に関わる科目の単位を取

得してきた学生にとっては、2年次後期になると「領域」と直接的に関連のある科目のほとんどが履修済みとなり、I(05)後の時期(2年次後期)は環境・情報・ビジネスといった「領域」とは直接的に関連しない科目を多く受講している可能性がある。その結果として、「領域」科目を積極的に受講してきた学生の中で「領域」への関心が一時的に低下した者がいても不自然ではない。I(05)後における「領域」に対する関心の低下はこのような背景によるものと考えられる。一方、3年次前期は専門教育科目が本格的にスタートする時期であり、これが「領域」への関心を取り戻す契機となったのではないかとと思われる。この観察が正しい方向性を持つものであるならば、学生の学問的な関心を持続させるために2年次における専門導入ゼミナール⁽²⁾の教育内容がより重要な意味を持つことになる。

2.2.2. 「環境心理」に対するイメージ形成

次に「環境心理」に対する具体的なイメージの形成の推移をみる。設問B-2(環境心理として思い浮かぶものを2つ挙げてください。)(は、「環境心理」という用語がもつイメージがどの程度本学が掲げる内容(具体的には(1)のキーワード)と対応しているか、設問B-3(環境心理に分類される学問名を2つ挙げてください。)(は、「領域」のイメージが学問名と一致をみせているか、を尋ねたものである。それぞれの結果は、表2-5および表2-6に示されている。

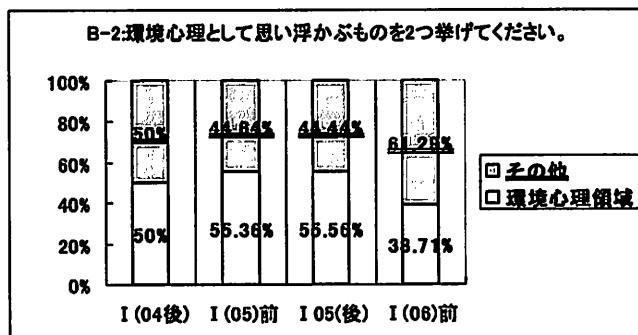


表2-5: 「環境心理」に対するイメージ

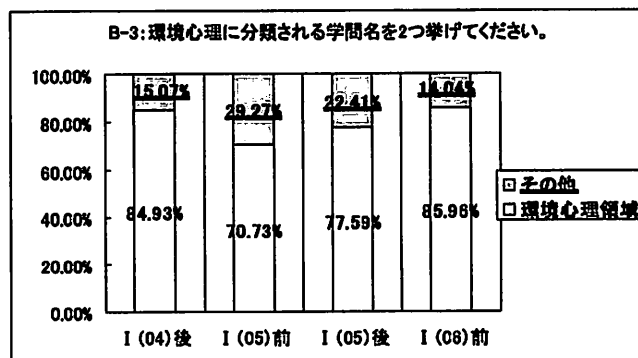


表2-6: 「環境心理」と学問名との対応

まず表 2-6 からみてみよう。表 2-6 については、学年が進行するとともに本学科が「領域」内容として掲げる学問名を適切に回答できるようになっていることを示している。ただし、この表をみる限り、I (04)後の調査で環境心理の学問名を適切に回答していた学生が、I (05)前で適切な回答を導き出すことができなくなったという印象を受けるかもしれない。しかしながら、これは必ずしもそうとはいえない。なぜならば、以下の表 2-7 が示すように、I (04)前の調査では、「心理学」や「言語学」と並んで「言語環境」や「家庭環境」といった、「領域」が掲げる名称ではあるものの、学問名とはいえないような回答が多かったが、I (06)前の調査では、表 2-8 が示すように、そのような回答はほとんどみられなくなり、「～学」や「～論」がつく、実際に「領域」に配置されているより学問名に近い名称のものを選ぶ回答が多くなっている（表 2-7 および表 2-8 はすべての回答から環境心理関連の科目名やキーワードのみを抽出したものであり、各々の比率は環境心理領域以外のキーワードや科目を含む全回答数に対する比率である）。

I (04) 後	回答数	%		回答数	%
心理(学)	20	27.40	言語(学)	9	12.16
家庭	6	8.11	行動心理	5	6.80
言語環境	4	5.41	家庭環境	4	5.41
発達心理	4	5.41	環境心理	3	4.11
臨床心理	3	4.11	社会心理	2	2.74
(社会)福祉	2	2.74	合計	62	84.93

表 2-7：I (04)後における B-3 の回答(環境心理関連のみ)

I (06) 前	回答数	%		回答数	%
環境心理学	11	19.2	心理学	7	12.28
社会心理学	6	10.53	行動心理	4	7.02
発達心理学	4	7.02	家庭環境論	3	5.26
社会福祉論	3	5.26	消費者心理学	2	3.51
人間関係論	2	3.51	福祉	1	1.75
カウンセリング	1	1.75	臨床	1	1.75
言語環境	1	1.75	環境心理概論	1	1.75
言語学	1	1.75	臨床心理学	1	1.75
			合計	49 人	85.96%

表 2-8：I (06)前における B-3 の回答(環境心理関連のみ)

以上の結果から、「環境心理」と「学問名」とのつながりは量的にも質的にも明確になりつつあるようであるが、それを考慮すると、表 2-5 の結果、特に第 4 回目のアンケートとなる I (06)前の結果はある種意外な結果ともいえる。「その他」

に分類される回答には、以下のものがある。

- (2) 自然(5 名)、人間環境(3 名)、人間(3)、学校(2 名)、環境(2 名)、文化環境(2 名)、(以下すべて 1 名)海、森、発達、むずかしい、パーソナルスペース、生物、統計、会社、意識構造、地球環境、家、生活、社会環境、マネジメント、文化、職場環境、都市環境、行動、環境と人間、住宅

(2)には、「文化環境」や「地球環境」のように明らかに他領域のものと思われるものもあるが、「人間環境」や「環境」多くはどちらかという「環境心理」と明白に判断できかねる回答である。よって、表 5 の I (06) 前の結果は、必ずしも「環境心理」イメージの崩壊を意味するものではなく、「環境心理」イメージが、一見すると別の概念領域と思われていたものとも有機的に結びつき始めたと考えられることでもある。

いずれにせよ、「環境心理」という用語に描かれるイメージに関しては、本学科所属学生がある程度共有するような環境心理のイメージは形成されるというよりはそれがさらに分散化する結果となっている。

2.2.3. 「領域」内での関心の推移

これまでは本学科所属学生の「領域」に対する意識をみてきたが、ここでは「領域」内での関心の推移をみる。「領域」には「心理」「家庭環境」「言語環境」の分野があり、設問 B-4 (環境心理領域の中で最も興味のある分野は何ですか。)の結果は表 2-9 に示される。

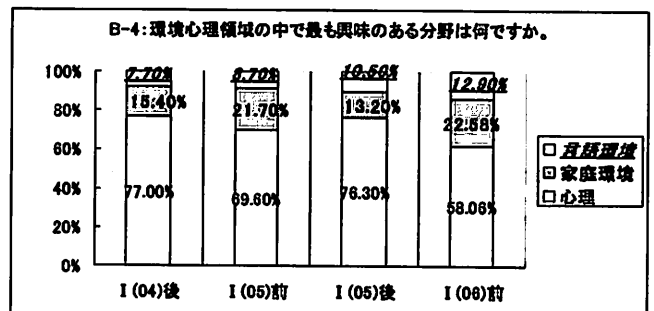


表 2-9：「領域」内 3 分野の関心の分布

B-4 は領域に実際所属している学生だけではなく、領域を専攻していない学生の意見も反映されている点では注意が必要であるが、調査によって多少程度のばらつきはあるものの、一貫して「心理」に対する関心の高さが窺える。一方で、I (06)前では家庭環境への関心も高まっている。言語は徐々にはあるが関心が高まりつつある。

設問 B-5 (B-4 の(a)(b)(c)の分野はそれぞれ関係があると思いますか。)は、領域内の 3 分野について、それぞれ関連性があると思うかどうかを尋ねものである。この結果は表 2-10 に

示されており、この設問に関しては、I (05)後では若干下がるものの、I (06)前において「領域」内の各分野の関連性を認める傾向が高くなる事実が観察される。

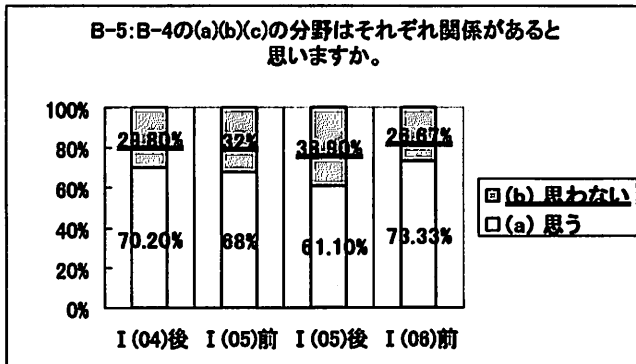


表 2-10：「領域」内 3 分野の関連性

B-5 における I (06)前の結果を、これを 3 つの「領域」系ゼミに所属している学生とそれ以外の領域ゼミに所属している学生との意識の違いを調べてみると、「領域」3 分野のゼミに所属している 14 名の学生のうち 12 名(85.71%)が、3 分野の関連性を認めており、「領域」以外のゼミに所属している学生よりも 3 つの分野に関連性を見出している傾向が認められる。

	相関関係がある	相関関係がない
「領域」系ゼミ	12 名(85.71%)	2 名 (12.28%)
非「領域」系ゼミ	10 名(62.50%)	6 名 (37.50%)

表 2-11：所属ゼミ別の意識の違い

2.3. 「領域」に対する就職観

2.3.1. 総論

本節では「領域」と就職観との対応関係を考察する。設問 B-8 は、本学のカリキュラムから一旦離れて、一般論として「環境心理分野」を学んだ先に見えてくる就職先のイメージを尋ねたものである。一方、設問 B-10 は本学の「領域」で学んだ先に見えてくる就職先のイメージを尋ねたものである。これらの設問は、将来の就職先について、一般的なイメージとして自分たちが持っている「環境心理分野」と本学科の「領域」が提供しているカリキュラムとの間で何らかの乖離が存在しているかどうかを調べることを意図している。各回答者に上位 2 位まで選択してもらったが、それらをすべて含めた結果が表 2-12 にまとめられている。

B-8：(本学のカリキュラムとは別に、一般的な話として) 環境心理分野を学んだ学生らしい就職先として考えられるものを2つ挙げてください。(優先順位でお書きください。)(全体(1位+2位): 回答数: I (04)後(94), I (05)前(55), I (05)後(69), I (06)前(59))

B-8 (1+2)	(a)建設・ 不動産	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・ 通信	(e)飲食 業・宿泊	(f)卸売 り・小売
I (04) 後	6.38% (6)	3.19% (3)	0.00% (0)	7.45% (7)	2.13% (2)	2.13% (2)
I (05) 前	9.09% (5)	0.00% (0)	5.45% (3)	7.27% (4)	5.45% (3)	7.27% (4)
I (05) 後	2.80% (2)	1.45% (1)	4.35% (3)	5.70% (4)	4.35% (3)	1.45% (1)
I (06) 前	3.39% (2)	0.00% (0)	1.69% (1)	11.86% (7)	6.78% (4)	5.08% (3)

B-8 (1+2)	(g)金融	(h)医療・福 祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
I (04) 後	4.26% (4)	35.11% (33)	27.66% (26)	11.70% (11)	0.00% (0)
I (05) 前	1.82% (1)	30.91% (17)	20.00% (11)	10.91% (6)	1.82% (1)
I (05) 後	4.35% (3)	34.78% (24)	31.88% (22)	7.25% (5)	1.45% (1)
I (06) 前	1.69% (1)	27.12% (16)	18.64% (11)	18.64% (11)	5.08% (3)

表 2-12：B-8 の集計結果 (全体 (第 1 位+第 2 位))

B-10：本学の環境心理領域を学んだ学生らしい就職先として考えられるものを2つ挙げてください。(全体(1位+2位)：回答数：I(04)後(85)，I(05)前(50)，I(05)後(66)，I(06)前(59))

B-10 (1+2)	(a)建設・ 不動産	(b)製造	(c)運輸	(d) 情 報・通信	(e) 飲 食 業・宿泊	(f)卸売 り・小売
I 後 (04)	10.59% (9)	4.71% (4)	1.18% (1)	7.06% (6)	1.18% (1)	1.18% (1)
I 前 (05)	6.00% (3)	2.00% (1)	4.00% (2)	4.00% (2)	4.00% (2)	6.00% (3)
I 後 (05)	3.03% (2)	0.00% (0)	0.00% (0)	3.03% (2)	6.06% (4)	1.52% (1)
I 前 (06)	3.39% (2)	0.00% (0)	0.00% (0)	8.47% (5)	6.78% (4)	6.78% (4)
B-10 (1+2)	(g)金融	(h)医療・福 祉	(i)教育	(j)サービ ス	(k)その他	
I 後 (04)	2.35% (2)	32.94% (28)	25.88% (22)	12.94% (11)	0.00% (0)	
I 前 (05)	2.00% (1)	40.00% (20)	20.00% (10)	12.00% (6)	0.00% (0)	
I 後 (05)	4.55% (3)	37.88% (25)	27.27% (18)	15.15% (10)	1.52% (1)	
I 前 (06)	1.69% (1)	28.81% (17)	22.03% (13)	15.25% (9)	6.78% (4)	

表 2-13：B-10 の集計結果(全体 (第 1 位+第 2 位))

表 2-12 の、特に上位 3 つの変遷を表したのが表 2-14 である。

表 2-14 が示すように、I (04)後から I (05)前の計 3 回の調査では、医療福祉、教育の順で、この 2 つで全体の約半数を占めていたが、I (06)前では「サービス」を選択した学生の割合が急上昇し、「教育」と回答した学生と同数となっている。特に第 1 選択に至っては、表 2-15 に示されるように、「サービス」と「教育」の順位が逆転している。

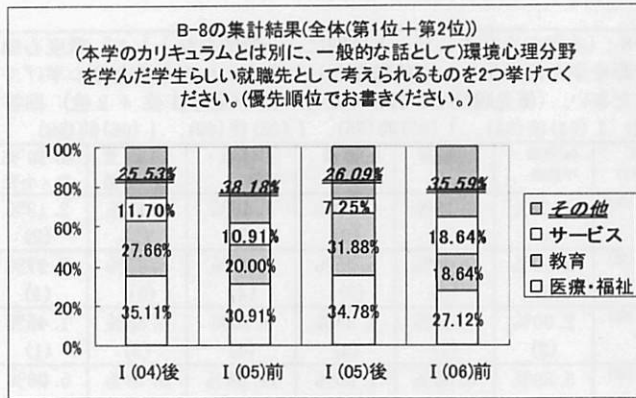


表 2-14:「環境心理分野」を学んだ学生の就職先
(上位3位の推移)

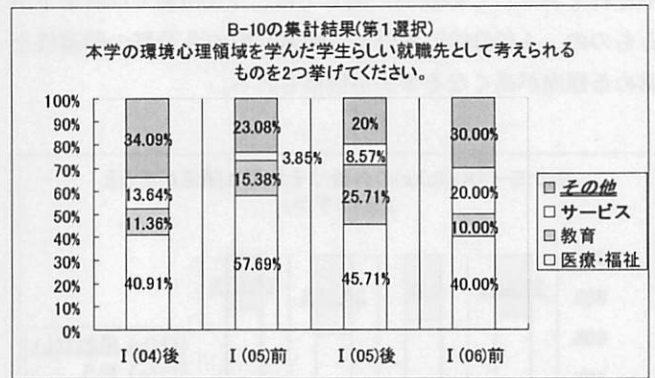


表 2-17:「領域」を学んだ学生の就職のイメージ
(第1選択)

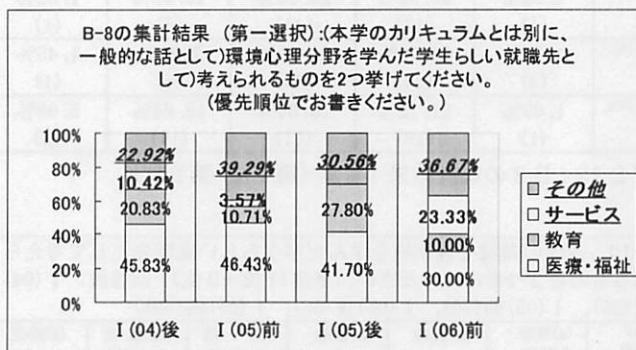


表 2-15:「環境心理分野」を学んだ学生の就職先
(第1選択)

この「サービス」業界への関心の急上昇した理由については、それが一時的なものなのかどうかの判断も含めて、現時点でははっきりしたことは判らない。ただ、I (06)前についてはもうひとつ気になるデータがある。表 2-18 を見てほしい。

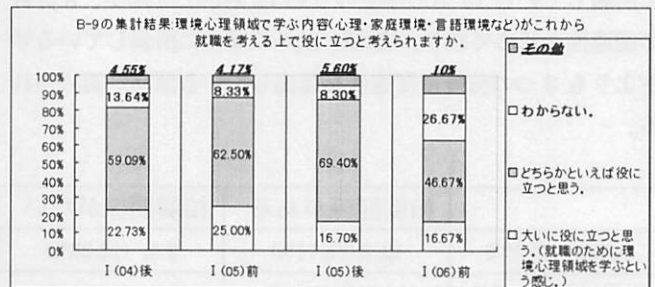


表 2-18: 本学で学ぶ学問的内容と就職先との相関

I (06)前における「サービス」業界への関心の上昇は、本学の「領域」が配置するカリキュラムを学んだ学生としての就職先のイメージを尋ねた設問 B-10 においても観察される。次の表 2-16 と表 2-17 は、それぞれ、設問 B-11 の第1選択+第2選択と第1選択における「医療・福祉」「教育」「サービス」の分布である。

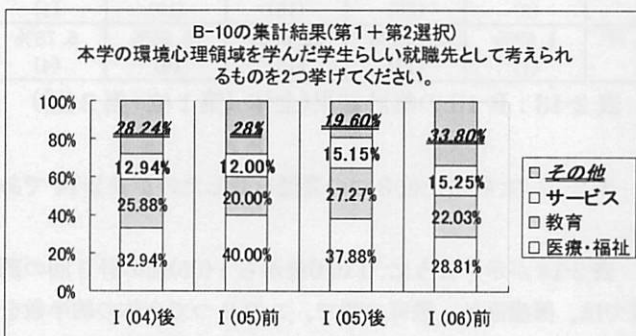


表 2-16:「領域」を学んだ学生の就職のイメージ
(第1選択+第2選択)

表 2-18 は設問 B-9(環境心理領域で学ぶ内容(心理・家庭環境・言語環境)がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。)に対する回答の分布である。最近2回の調査で「大いに役に立つ」と答えた学生が減少していることも気になる点であるが、「わからない」と答えた学生の割合が I (06)前で急増している。

I (06)前を実施した3年の前期は、大学内外で就職セミナーが始まる時期であり、カリキュラムや学問内容も含めて大学生活に慣れてきた学生の多くが、就職セミナーを通して卒業後の進路について本格的に考え始める時期である。I (06)前における意識の変化は、企業研究や就職のための自己分析を通じて個々の学生の就職に対する関心(あるいは不安)の表れと関連があるかもしれない。

B-8とB-10を比較して、「環境心理分野」を学んだ先に見える就職先と、本学が提供する「領域」カリキュラムの先に見えるそれとの異同については、表 2-14 と表 2-16、および表 2-15 と表 2-17 を比較する限り顕著な違いは見当たらない。

い。ただし、次節の考察と関連があることとして、本学で学ぶ「領域」のカリキュラムは「医療・福祉」と結びつく傾向が、一般的な「環境心理分野」を学ぶ場合よりもやや強い、ということを指摘することができる。

2.3.2. 「領域」所属学生の就職観

最後に、現在「領域」に所属している学生に限定して、その就職に対する意識の変化を考察する。表 2-19 は、「領域」所属学生が B-10 で何を第 1 選択したかを表したものである。

I (04)後 (12名)		選択者数(名)	「領域」内比率
	医療・福祉	6	50.00
	教育	2	16.67
	サービス	3	25.00
	その他	1	8.33
I (05)前 (9名)		選択者数(名)	「領域」内比率
	医療・福祉	6	66.67
	教育	2	22.22
	サービス	0	0.00
	その他	1	11.11
I (05)後 (12名)		選択者数(名)	「領域」内比率
	医療・福祉	6	50.00
	教育	3	25.00
	サービス	2	16.67
	その他	1	8.33
I (06)前 (14名)		選択者数(名)	「領域」内比率
	医療・福祉	8	57.14
	教育	0	0.00
	サービス	4	28.57
	その他	2	14.29

表 2-19 : 「領域」所属学生における B-10 (第 1 選択)の回答状況

対象者が少ないため表 2-17 の結果と単純に比較することはできないものの、当事者である「領域」所属学生の「医療・福祉」に対する志向性は「領域」外の所属学生に比べて高いといえる。この結果として、表 2-17 が示すように、本学科全体の「医療・福祉」への関心の比率を押し上げていると分析される。

なお、今回、「領域」所属学生個人の意識の変化もあわせて調査したが、特に「領域内」のゼミ配属先による有意な違いを見出すことができなかった。

2.4. まとめ

この節では I 期性の 2004 年度後期から 2006 年前期までのセメスターごとに実施してきた調査をもとに、本学科所属学生の「領域」に対する学問および就職観の意識を考察してきた。「領域」の学問体系への意識に関しては、調査の対象となる学生が 3 年になり、「領域」が掲げる学問体系についての理

解が着実に進んでいる状況が観察される(表 2-6 参照)。就職観に関しては、「環境心理」という学問領域もしくは学問体系が「医療・福祉」と結びつく認識されている傾向が強い点では変化は無く、特にそれが「領域」ゼミ所属学生の中で顕著であること、そしてこれまで第 2 番目に強かった「環境心理」と「教育」との結びつきが希薄になる傾向が観察される(表 2-14 から表 2-17 参照)。

本研究のように同じ設問で時期を変えて実施する調査の場合、調査を実施した時期が学生生活にとってどのような意味を持っているのかという認識が、回答者の心理に少なからず影響を与えるものと考えられる。本節では、2 年次後期(I (05)後)における「領域」への一時的な関心の低下(表 2-4 参照)が、学生の単位取得状況と関連している可能性を指摘し、また 3 年次前期(I (06)前)における就職観の変化(表 2-14 から表 2-17)が、就職セミナーなどによる将来の進路における情報の獲得に伴い、自らの将来像に対してこれまで以上に真剣に考えるようになったことと関係する可能性を指摘した。

脚注

(1) 2 節の執筆は石崎が担当した。

(2) 専門導入ゼミナールは 2 年次の学生が所属する必修科目であり、学生は自分の希望する領域に所属することになっている。

3. 大学生の適応に関する検討⁽¹⁾

3.1. 目的

本研究は、大学生の適応に関連する諸変数を検討することを目的とするが、ここでは、大学 1、2、3 年次の大学生生活満足度・大学生生活重要度・友人関係重要度の 3 変数のみについて検討を行う。

中川ら(2006)において、年次間における友人関係重要度どうしの強い関連性と、対人面での印象と大学生生活全般への関与や重要度と比較的独立的であることが見出されたが、これは一つの学年(2004 年度生)の 1・2 年次のデータから導き出された考察であった。本研究では、対象を他の学年(2005 年度生)に広げ、2004 年度生については 1 年次から 3 年次後期までの縦断的なデータに基づいて、上記知見の適用可能性を検討する。

3.2. 方法

2004 年度生を対象に、2004 年度(以下、1 年次)の 10 月と 2005 年度(以下、2 年次)の同じく 10 月、および 2006 年度の 4 月(以下、3 年次前期)と 10 月(以下、3 年次後期)に、質問紙を用いた調査を行った。2005 年度生については、

2005 年度 4 月（以下、1 年次）と 2006 年度の 4 月（以下、2 年次前期）と 10 月（以下、2 年次後期）に同じく質問紙を用いた調査を行った。内藤ら（2005）に示された質問紙内容のうち、今回は以下の 3 変数について取り扱う。

『大学生活満足度』 本学に入学して（本学での学生生活に）どの程度満足しているか、5 件法により回答させた。

『大学生活重要度』 本学での 4 年間で自分の人生にとってどの程度重要であるか、5 件法による回答を求めた。

『大学での友人関係重要度』 本学での友人関係がどの程度重要であるかを 5 件法により回答させた。

3.3. 結果と考察

2004 年度生の 4 時点における記述統計量を表 3-1 に示す。3 変数それぞれについて、1 要因 4 水準（年次・時期）の分散分析を行ったが、4 時点間に差は見られなかった。

次に、2005 年度生の 3 時点における記述統計量を表 3-2 に示す。同じく、3 変数それぞれについて、1 要因 4 水準（年次・時期）の分散分析を行ったが、4 時点間に差は見られなかった。

2004 年度生の 4 時点間の相関を以下に示す（表 3-3）。

友人関係重要度間の相関は一貫して強く、中川ら（2006）の結果と一致する。また、1 年次を除いて大学生活全般についての変数と関連を持ちにくいという点も先行研究と一致する点である。1 年次においては大学生活に関する満足度や重要と感じている度合いと友人関係へ重要と感じている度合いは分化していないが、2 年次以降に友人関係に対する重要度が独立をする。一方、大学生活に対する満足度と重要度は各時点で相関を示すだけでなく、他時点の満足度・重要度へ影響を及ぼしうる。

表 3-1 2004 年度生の学校生活満足度と大学生生活の重要度、友人関係重要度間の記述統計量

		<i>M</i>	<i>SD</i>
学校生活満足度	1 年次	3.10	1.10
	2 年次	2.83	.91
	3 年次前期	2.82	.82
	3 年次後期	2.64	1.04
大学生活重要度	1 年次	4.04	.91
	2 年次	4.14	.90
	3 年次前期	4.00	.95
	3 年次後期	4.04	.76
友人関係重要度	1 年次	4.33	.97
	2 年次	4.25	1.00
	3 年次前期	4.27	1.05
	3 年次後期	4.15	.86

表 3-2 2005 年度生の学校生活満足度と大学生生活の重要度、友人関係重要度間の記述統計量

		<i>M</i>	<i>SD</i>
学校生活満足度	1 年次	3.33	.80
	2 年次前期	3.41	.91
	2 年次後期	3.35	1.05
大学生活重要度	1 年次	4.29	.88
	2 年次前期	4.27	.78
	2 年次後期	4.22	.90
友人関係重要度	1 年次	4.34	.96
	2 年次前期	4.28	.86
	2 年次後期	4.17	.81

表3-3 2004年度生の学校生活満足度と大学生生活の重要度、友人関係重要度の相関

		1年次(N=43~47)		2年次(N=23~36)			3年次前期(N=22~30)			3年次後期(N=14~27)		
		大学生生活 重要度	友人関係 重要度	大学生生活 満足度	大学生生活 重要度	友人関係 重要度	大学生生活 満足度	大学生生活 重要度	友人関係 重要度	大学生生活 満足度	大学生生活 重要度	友人関係 重要度
1 年次	大学生生活満足度	.46**	.33*	.43*	.18	.12	.62**	.47*	.25	.39	.64**	.37
	大学生生活重要度	—	.47**	.23	.22	.30	.51*	.61**	.52**	.56*	.79**	.37
	友人関係重要度		—	.13	.05	.72**	.26	.13	.50*	.36	.30	.65**
2 年次	大学生生活満足度			—	.45**	-.14	.46*	.53**	.14	.35	.36	-.38
	大学生生活重要度				—	.12	.18	.50*	.37	.29	.49*	.02
	友人関係重要度					—	-.30	.07	.56**	.14	.27	.71**
3 年次 前期	大学生生活満足度						—	.51**	.11	.64**	.46	-.16
	大学生生活重要度							—	.35	.49*	.69**	.12
	友人関係重要度								—	.09	.46	.78**
3 年次 後期	大学生生活満足度									—	.48*	.06
	大学生生活重要度										—	.34
	友人関係重要度											—

** $p < .01$ * $p < .05$

次に、2005年度生の3時点間の相関を以下に示す（表3-4）。

2004年度生と同じく友人関係重要度間の相関は一貫して強く、中川ら（2006）の結果と一致する。しかし1年次を除いて、大学生生活全般についてと独立的ではなくなるという傾向が見られる。各時期ごとに見ると、1年次においては大学生生活満足度と大学生生活重要度のみが正の相関を示すが、2年次前期では3変数間すべてにおいて相関関係が見られ、2年次後期では大学生生活に関する変数どうしと大学生生活重要度と友人関係重要度間に相関が見られる。また、他時点との相関を見ると、大学生生活満足度と友人関係満足度の直接の相関のみが見られず、大学生生活重要度と満足度、および大学生生活重要度と友人関係重要度間に関連性が見られる。

両学年に共通してみられるのは、友人関係重要度の時点間での相関である。これは先行報告の知見が他学年・他年次にも適用できる可能性があることを示唆するものである。初期の期待に沿った対人関係が構築されることは対人認知・対人

関係の基本的な知見の一つであり、ここではそれが確認されたと考えられる。

両学年で異なる傾向を示したのは、2004年度生が1年次においては大学生生活と友人関係が未分化であったのが2年次に分化した一方で、2005年度生が独立から統合の方向を示した点である。2004年度生2年次以降の分化状態のなかで、大学生生活全般に関する意識が関連をみせ、とくに満足感が大学へのコミットを深めさせそこに意義を見出す傾向を持つことが推測できる。2005年度生の2年次以降に見られる統合は、大学生生活に意義を見出す程度が大学全般への満足度と友人関係の重要度と関連を持つという点である。植村ら（2001）は、入学時の満足感が大学生生活全般へ波及し、結果的に大学への満足感につながると考察するが、同様の傾向が見られるかは2年次までの本研究のデータでは不十分であり、継続した検討が求められる。

表3-4 2005年度生の学校生活満足度と大学生生活の重要度、友人関係重要度の相関

		1年次(N=58~62)		2年次前期(N=33~50)			2年次後期(N=37~52)		
		大学生生活 重要度	友人関係 重要度	大学生生活 満足度	大学生生活 重要度	友人関係 重要度	大学生生活 満足度	大学生生活 重要度	友人関係 重要度
1 年次	大学生生活満足度	.50**	.23	.66**	.32	.27	.41*	.51**	.26
	大学生生活重要度	—	.19	.11	.59**	.41*	.18	.45**	.27
	友人関係重要度		—	.31	.53**	.54**	.14	.35*	.47**
2 年次 前期	大学生生活満足度			—	.41**	.45**	.51**	.39*	.20
	大学生生活重要度				—	.67**	.32*	.74**	.37*
	友人関係重要度					—	.20	.46**	.33*
2 年次 後期	大学生生活満足度						—	.49**	.23
	大学生生活重要度							—	.41**
	友人関係重要度								—

** $p < .01$ * $p < .05$

3 節引用文献

中川直志・石崎保明・坂本剛・高橋陽子・内藤徹 2006 人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究（その2），環境経営研究所年報，5，1-30.

植村善太郎・小川一美・吉田俊和 2001 大学生の適応過程に関する縦断的研究（2）—大学生の学習への取り組み，および大学生活満足感に関連する要因の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），48，29-43.

3 節注

（1）執筆担当：坂本

4. 本学学生の国際性に関する意識についての調査結果⁽¹⁾

4.1.これまでの調査結果

本節では、人間環境系学部・学科に所属する学生が、「国際性」という抽象概念をどう理解しているかについて検討する。これまでにに行ったアンケート回数は、Ⅰ期生に対して3年間5回、Ⅱ期生に対して2年間4回、合計9回のアンケート調査を行った。

日本の学校教育では、最初に学ぶ外国語が英語であり、本学でも英語を必修科目としており、「英語に関する意識」の調査することで、本学学生の国際性に関する認識の傾向を明らかにできると想定して、表4-1にあるような調査を行った。

表4-1 英語に関する意識

(Ⅰ期生 2004 年後期)

		英会話は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	回収数・率 49	25	24	2	47	45	4	31	18
% (全体)	68.06%	51.02	48.98	4.08	95.92	91.84	8.16	63.27	36.73
留学生	16	12	4	1	15	16	0	14	2
% (留学生)	72.73%	75.00	25.00	6.25	93.75	100.00	0.00	87.50	12.50

(Ⅰ期生 2005 年前期)

		英語は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	回収数・率 24	14	10	1	23	19	5	18	6
% (全体)	33.80%	58.33%	41.67%	4.17%	95.83%	79.17%	20.83%	75.00%	25.00%
留学生	8	6	2	1	7	7	1	7	1
% (留学生)	40.00%	75.00%	25.00%	12.50%	87.50%	87.50%	12.50%	87.50%	12.50%

(Ⅱ期生 2005 年前期)

		英語は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	回収数・率 67	29	36	3	62	54	10	55	14
% (全体)	63.92%	43.28%	53.73%	4.48%	92.54%	80.60%	14.93%	56.7%	14.4%
留学生	18	11	7	0	18	16	2	21	2
% (留学生)	62.07%	61.11%	38.89%	0.00%	100.00%	88.89%	11.11%	75.0%	7.1%

（Ⅰ期生 2005 年後期）

		英語は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
	回収数・率	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	36	21	15	2	35	25	9	25	11
% (全体)	50.70%	58.33%	41.67%	5.56%	97.22%	69.44%	25.00%	69.44%	30.56%
留学生	10	9	1	1	9	9	0	10	0
% (留学生)	45.5%	90.00%	10.00%	10.00%	90.00%	90.00%	0.00%	100.00%	0.00%

（Ⅱ期生 2005 年後期）

		英語は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
	回収数・率	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	71	33	35	7	62	58	10	55	14
% (全体)	73.20%	46.48%	49.30%	9.86%	87.32%	81.69%	14.08%	77.46%	19.72%
留学生	24	16	7	4	19	21	1	21	2
% (留学生)	82.76%	66.67%	29.17%	16.67%	79.17%	87.50%	4.17%	87.50%	8.33%

（Ⅰ期生 2006 年前期）

		英語は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
	回収数・率	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	30	14	15	0	29	19	10	18	11
% (全体)	50.00%	46.67%	50.00%	0.00%	96.67%	63.33%	33.33%	60.00%	36.67%
留学生	17	4	2	0	6	5	1	5	1
% (留学生)	28.33%	57.14%	28.57%	0.00%	85.71%	71.43%	14.29%	71.43%	14.29%

（Ⅱ期生 2006 年前期）

		英語は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
	回収数・率	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	50	23	24	3	44	36	11	34	13
% (全体)	56.18%	46.00%	48.00%	6.00%	88.00%	72.00%	22.00%	68.00%	26.00%
留学生	16	12	3	1	14	14	1	13	1
% (留学生)	57.14%	75.00%	18.75%	6.25%	87.50%	87.50%	6.25%	81.25%	6.25%

(I 期生 2006 年後期)

		英語は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
	回収数・率	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	27	14	13	0	27	20	7	15	12
% (全体)	45.00%	51.85%	48.15%	0.00%	100.00%	74.07%	25.93%	55.56%	44.44%
留学生	3	2	0	0	2	2	0	2	0
% (留学生)	11.11%	66.67%	0.00%	0.00%	66.67%	66.67%	0.00%	66.67%	0.00%

(II 期生 2006 年後期)

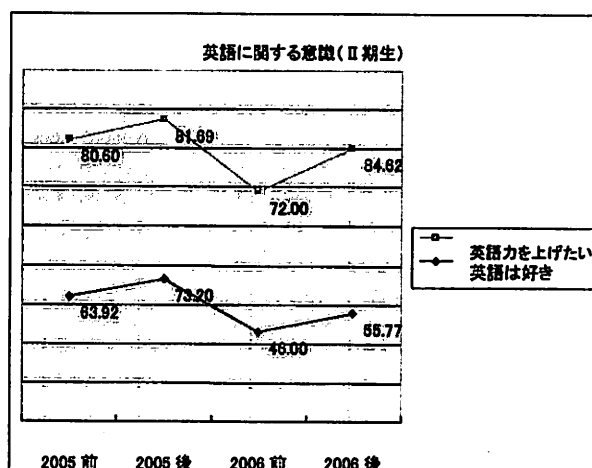
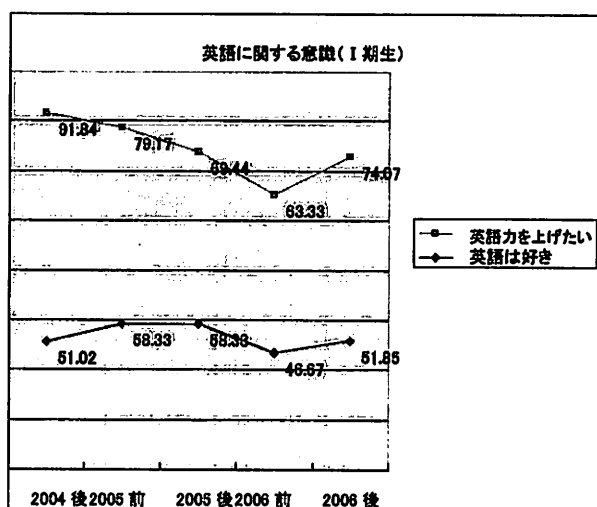
		英語は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
	回収数・率	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	52	29	22	4	47	44	8	35	15
% (全体)	58.43%	55.77%	42.31%	7.69%	90.38%	84.62%	15.38%	67.31%	28.85%
留学生	19	15	3	2	16	17	2	16	1
% (留学生)	67.86%	78.95%	15.79%	10.53%	84.21%	89.47%	10.53%	84.21%	5.26%

本学は多くの中国人留学生を受け入れており、彼らにとっての第一外国語は日本語であり、英語は第二もしくは第三外国語として日本で学んでおり、当然日本人学生とは異なる意識をもっているであろうことから、留学生のみの集計も同時に行った。

本学学生諸氏には、何回にもわたるアンケートの手間のかかる記入に、誠実に回答し、本共同研究に協力してくれたことに

ここに謝意を表する。回答については、質問全項目に回答していないものも有効回答として扱ったため、回答率が 100% に満たないものもあることを先に報告しておく。

図 4-1 英語に関する意識



本学学生の「英語に関する意識」から得られた調査結果は以下のようなものである。

上記のグラフで明らかなように、Ⅰ期生・Ⅱ期生とも「英語は好き」・「英語力を上げたい」という質問に対する回答がほぼ同じ曲線を描いていることがわかる。

本学での英語履修必修年次は1年時であるため、第一回目のアンケートは高い数値を示し、自由選択になる2年時になると意識の低下が見られる。さらに1年後の3年時には、今度は逆に上昇傾向を示している。

これは、2年次になると学生は大学にも慣れ、講義以外の大学生活を楽しもうとする当世風学生気質のあらわれであろう。また、講義が自由選択となることも英語に対する意識に影響を与えていると思われる。

3年次になると一転上昇傾向に転じるが、就職活動の準備が始まり、就職には英語力の必要性があることを自覚するからであろう。また、Ⅱ期生はⅠ期生よりも早く上昇傾向に転じてい

るが、これはⅠ期生という先輩の姿を日々大学で目にし、海外語学研修や就職活動への取り組みを身近に感じ、より早く意識が高まるためだと思われる。

4.2. 本学学生の国際性に対する意識

昨今の学生は、抽象語に対する理解ができていないとよく言われることであるが、本学の学生もゼミでの雑談や講義で話す内容に抽象概念を用いると、戸惑いを示す学生が少なくない。そのため、国際性についての質問項目は、まず具体的内容を問う質問を行った。

筆者の国際性に関する準拠点は、人格形成期を過ごす家庭、ひいては母国への関心が国際性へとつながるという立場に立っており、質問内容も母国への関心を問う内容にした。

表 4-2 国際性の向上に必要だと思うもの（複数回答可）

（Ⅰ期生 2004 年後期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	14	21	16	16	33	1	101
%（全体）	13.86	20.79	15.84	15.84	32.67	0.99	
留学生	3	5	6	5	10	0	29
%（留学生）	10.34	17.24	20.69	17.24	34.48	0.00	

（Ⅰ期生 2005 年前期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	15	9	5	6	17	3	55
%（全体）	27.27%	16.36%	9.09%	10.91%	30.91%	5.45%	
留学生	4	3	1	1	7	2	18
%（留学生）	22.22%	16.67%	5.56%	5.56%	38.89%	11.11%	

（Ⅱ期生 2005 年前期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	23	30	19	8	43	11	134
%（全体）	17.16%	22.39%	14.18%	5.97%	32.09%	8.21%	
留学生	4	5	7	4	14	1	35
%（留学生）	11.43%	14.29%	20.00%	11.43%	40.00%	2.86%	

（Ⅰ期生 2005 年後期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	15	13	7	5	21	1	2
%（全体）	24.19%	20.97%	11.29%	8.06%	33.87%	1.61%	3.23%
留学生	3	2	2	0	7	1	0
%（留学生）	18.75%	12.50%	12.50%	0.00%	43.75%	6.25%	0.00%

（Ⅱ期生 2005 年後期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	31	20	23	10	44	3	131
%（全体）	23.66%	15.27%	17.56%	7.63%	33.59%	2.29%	
留学生	10	6	9	2	18	1	46
%（留学生）	21.74%	13.04%	19.57%	4.35%	39.13%	2.17%	

（Ⅰ期生 2006 年前期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	15	20	9	6	21	2	71
%（全体）	20.55%	27.40%	12.33%	8.22%	28.77%	2.74%	
留学生	1	3	2	3	6	0	15
%（留学生）	6.67%	20.00%	13.33%	20.00%	40.00%	0.00%	

（Ⅱ期生 2006 年前期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	21	18	16	6	35	4	100
%（全体）	21.00%	18.00%	16.00%	6.00%	35.00%	4.00%	
留学生	4	5	6	3	11	1	30
%（留学生）	13.33%	16.67%	20.00%	10.00%	36.67%	3.33%	

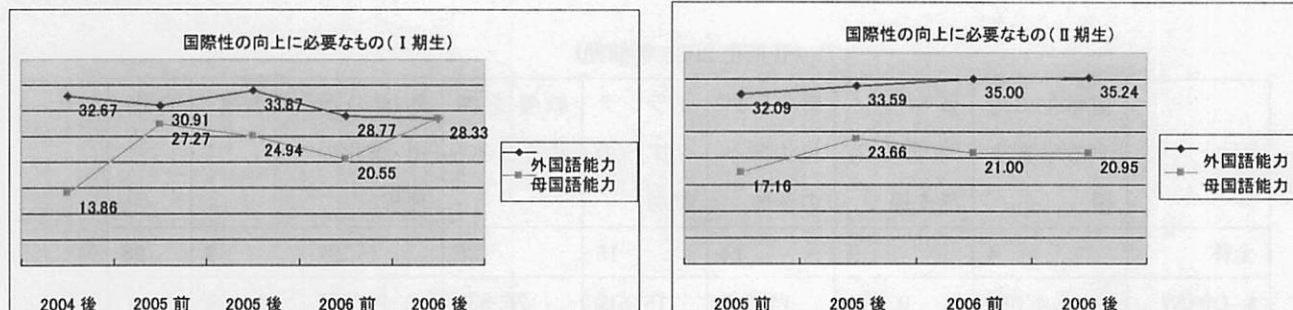
（Ⅰ期生 2006 年後期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	17	15	6	5	17	0	60
%（全体）	28.33%	25.00%	10.00%	8.33%	28.33%	0.00%	
留学生	1	1	1	1	2	0	6
%（留学生）	0.00%	0.00%	0.00%	16.67%	33.33%	0.00%	

（Ⅱ期生 2006 年後期）

	母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	合計
全体	22	20	18	7	37	1	105
%（全体）	20.95%	19.05%	17.14%	6.67%	35.24%	0.95%	
留学生	5	10	8	3	16	0	42
%（留学生）	11.90%	23.81%	19.05%	7.14%	38.10%	0.00%	

図 4-2 国際性の向上に必要なと思うもの



本学の学生が、「国際性の向上に必要なもの」だと考えているものを問う質問では、Ⅰ期生とⅡ期生との間が明確に異なる興味深い結果となった。

質問項目 6 項目のうち、比率上位二項目はⅠ期生、Ⅱ期生共に「外国語能力」・「母国語能力」を選択している者の比率が高い。しかし、比重の高さの変化は、Ⅰ期生が学年を上がるにつれて「母国語能力」を選択する者が増加し、「2006 後」データでは数値が一致するまでになっているのに対し、Ⅱ期生では、ほぼ一貫して「外国語能力」が一位を占め、その次に「母国語能力」を選択している傾向が一貫している。

英語に関するアンケート結果がほぼ一致した曲線を描いているのに対し、抽象的な質問である「国際性」についての質問で、Ⅰ期生とⅡ期生にこのような差異が現れた理由としては、次のことが考えられる。

この共同研究を行うにあたって直面した難問は、学年が上がるほど学生が大学内で一堂に会する機会が減り、質問紙の回収が困難になっていったことである。したがって、同じ時点の調査では、Ⅰ期生の方がⅡ期生よりも回収率が低くなっている。しかし、これは逆の見方をすれば、質問に回答しているⅠ期生は学修意欲が高く、学内で教員と頻繁に接しており、大学で学問を修めるにあたって母国語能力の必要性を強く感じている学生だと言うことができる。あくまで推測ではあるが、Ⅰ期生は、大学での勉学、就職活動には母国語で読み、考え、書く力が求められていることを理解しているとも言えるだろう。

4.3.国際性への取り組み

学生が、自分自身の国際性への取り組みについてどのような意識をもっているかを調査するために、以下のような質問を行った。

表 4-7 国際性を高めるためにできると思うもの（複数回答可）

（Ⅰ期生 2004 年後期）

	留学生に対する学業支援	留学生に対する生活支援	青年海外協力隊への参加	ボランティアへの参加	教養を深めること	外国の歴史・文化の理解	その他	合計
全体	9	10	6	13	17	27	2	84
%（全体）	10.71%	11.90%	7.14%	15.48%	20.24%	32.14%	2.38%	
留学生	6	8	4	3	8	9	0	38
%（留学生）	15.79%	21.05%	10.53%	7.89%	21.05%	23.68%	0.00%	

（Ⅰ期生 2005 年前期）

	留学生に対する学業支援	留学生に対する生活支援	青年海外協力隊への参加	ボランティアへの参加	教養を深めること	外国の歴史・文化の理解	その他	合計
全体	7	7	5	7	13	12	1	52
%（全体）	13.46%	13.46%	9.62%	13.46%	25.00%	23.08%	1.92%	
留学生	4	4	1	2	4	4	0	19
%（留学生）	21.05%	21.05%	5.26%	10.53%	21.05%	21.05%	0.00%	

（Ⅱ期生 2005 年前期）

	留学生に対する学業支援	留学生に対する生活支援	青年海外協力隊への参加	ボランティアへの参加	教養を深めること	外国の歴史・文化の理解	その他	合計
全体	4	9	14	15	26	27	3	98
%（全体）	4.08%	9.18%	14.29%	15.31%	26.53%	27.55%	3.06%	
留学生	4	4	2	1	5	5	0	21
%（留学生）	19.05%	19.05%	9.52%	4.76%	23.81%	23.81%	0.00%	

（Ⅰ期生 2005 年後期）

	留学生に対する学業支援	留学生に対する生活支援	青年海外協力隊への参加	ボランティアへの参加	教養を深めること	外国の歴史・文化の理解	その他	合計
全体	0	5	3	8	11	16	18	2
%（全体）	0.00%	7.94%	4.76%	12.70%	17.46%	25.40%	28.57%	3.17%
留学生	0	2	2	1	3	4	6	0
%（留学生）	0.00%	10.53%	10.53%	5.26%	15.79%	21.05%	31.58%	0.00%

（Ⅱ期生 2005 年後期）

	留学生に対する学業支援	留学生に対する生活支援	青年海外協力隊への参加	ボランティアへの参加	教養を深めること	外国の歴史・文化の理解	その他	合計
全体	8	8	9	20	21	34	24	0
%（全体）	6.40%	6.40%	7.20%	16.00%	16.80%	27.20%	19.20%	0.00%
留学生	5	5	3	5	5	12	9	0
%（留学生）	11.36%	11.36%	6.82%	11.36%	11.36%	27.27%	20.45%	0.00%

（Ⅰ期生 2006 年前期）

	留学生に 対する学 業支援	留学生に 対する生 活支援	青年海外協 力隊への参 加	ボランテ ィアへの 参加	教養を 深める こと	外国語能 力	外国の歴 史・文化の 理解	その他	合計
全体	4	5	6	8	12	14	16	0	65
%（全体）	6.15%	7.69%	9.23%	12.31%	18.46%	21.54%	24.62%	0.00%	
留学生	1	2	1	2	2	5	5	0	18
%（留学生）	5.56%	11.11%	5.56%	11.11%	11.11%	27.78%	27.78%	0.00%	

（Ⅱ期生 2006 年前期）

	留学生に 対する学 業支援	留学生に 対する生 活支援	青年海外協 力隊への参 加	ボランテ ィアへの 参加	教養を 深める こと	外国語能 力	外国の歴 史・文化の 理解	その他	合計
全体	9	5	7	12	20	25	23	1	102
%（全体）	8.82%	4.90%	6.86%	11.76%	19.61%	24.51%	22.55%	0.98%	
留学生	8	5	3	1	4	6	7	0	34
%（留学生）	23.53%	14.71%	8.82%	2.94%	11.76%	17.65%	20.59%	0.00%	

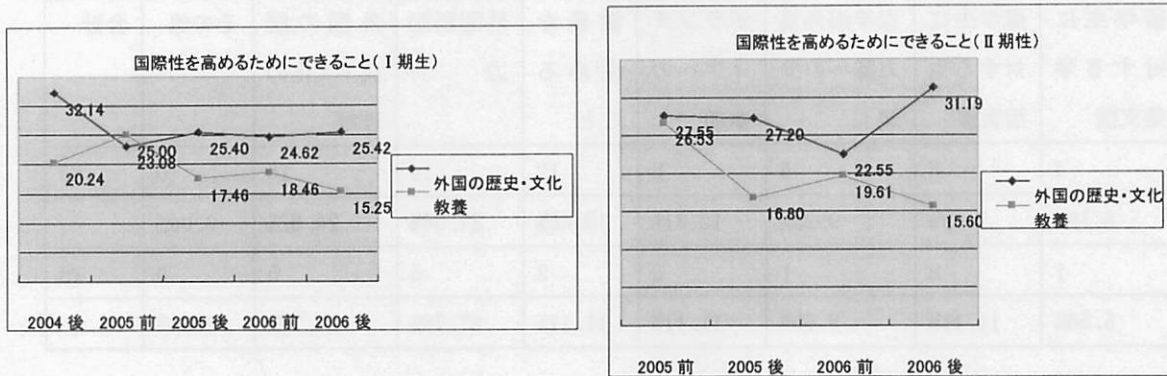
（Ⅰ期生 2006 年後期）

	留学生に 対する学 業支援	留学生に 対する生 活支援	青年海外協 力隊への参 加	ボランテ ィアへの 参加	教養を 深める こと	外国語能 力	外国の歴 史・文化の 理解	その他	合計
全体	4	4	2	8	9	17	15	0	59
%（全体）	6.78%	6.78%	3.39%	13.56%	15.25%	28.81%	25.42%	0.00%	
留学生	0	1	0	0	1	2	2	0	6
%（留学生）	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	

（Ⅱ期生 2006 年後期）

	留学生に 対する学 業支援	留学生に 対する生 活支援	青年海外協 力隊への参 加	ボランテ ィアへの 参加	教養を 深める こと	外国語能 力	外国の歴 史・文化の 理解	その他	合計
全体	4	8	10	11	17	34	23	2	109
%（全体）	3.67%	7.34%	9.17%	10.09%	15.60%	31.19%	21.10%	1.83%	
留学生	3	5	4	1	7	14	8	0	42
%（留学生）	7.14%	11.90%	9.52%	2.38%	16.67%	33.33%	19.05%	0.00%	

図4-3 国際性を高めるためにできると思うこと



筆者の国際性についての解釈は、自身の確たる自我を確立しつつ、異質な他者を受容できる包容力を持てるよう努力していく過程で身に付くものだと考えている。教養とはその基礎となる、他者のとの関係性の取り方の指針となるものと考え。人間の心の構造とは、自尊心を守ろうとする固い自我に、それを取り巻く他者へ共鳴する柔らかい自我が包み込んでいるようなものである。教養とは、人間が生きていく力となるものである。つねに深く、誠実であれと反省する姿勢、周囲の人々に対する言動や感情表出の適切さ(propriety)、丸山政男のいう「他者感覚」、そうしたものが教養であり、それらを身につけていることが、国際的に認められるために必要なセンスなのである。「教養」を質問項目としたのは以上のような理由からである。

また、視点を変えれば「教養」とは家庭のなかで自ずと身につく素養でもある。ブルデューが「文化資本」という表現を用いたように、家族との会話、見るテレビ番組、聴く音楽のジャンル、家のなかの家具調度、それらがどういったものであるかが、その環境で育つ人間の無形の財となり、将来どの階層に属するかを決定する要因となるのである。

学生自身の国際性への取り組みは、2005年前期の調査では、II期生の調査結果が、英語への関心の低さと共に、「教養」を重視する傾向が興味深かった。ただし、この時点では学生各自が、「国際性」・「教養」をどう考えているかを問う記述式の質問をしなかったため、「教養」という一見かつよく見える言葉に学生がなんとなく惹かれた可能性もあったため、次の調査からは記述式の質問も加えた。

グラフでわかるように、外国の歴史・文化の理解の比率は一貫して高く、初めのうちこそ「教養」を選択する比率が高かったものの、調査を繰り返すうちに「その他」で「外国語」を記入する学生が増加し、2006年度調査から質問項目に「外国語」を加えた。その結果、I期生・II期生共に「外国語」の比率が一番高くなり、その次に「外国の歴史・文化への理解」という調査結果となった。

4.4. 「国際性」の調査を振り返って

2005年後期から「国際性」、2006年度から「教養」とは何かと記述式で問う調査を行った。その回答には、「国際性」に対し「他国との類似点や差異を理解する」、「教養」に対し「心の豊かさ」と答える学生が数名いた一方で、「国際性とは国際交流のこと」、「教養とは知識」あるいは「教養とは教えてもらうもの」という回答が多数を占めた。つまり、大多数は、抽象的質問に対し類語反復で答えるか、抽象語を理解していないという結果となった。

ところで、本調査では、当初は学生の「家庭」への関心が高い傾向があった(中川他 2005)。しかし、「教養」を問う記述式の質問で、家庭や家族に言及した者は一人もいなかった。「教養うもの」と答えた学生は、「誰から」教えてもらうかについては全く記載がなかった。この点については、学生が、家族や家庭を空気のように当たり前と感じているのか、自らの素養を養う場である家族や家庭の機能が失われているのかは判断できない。定量的アンケートの限界である。本学の学生が家庭をどのように感じているかは、個別ヒヤリングが必要と思われる。

本学は多数の留学生が在籍しており、自身の内なる国際化を育む場が身近にある環境にある。しかし、これまでの調査結果を分析してみると、「外国の歴史・文化への理解」を選択する学生が多数いる一方で、留学生に対する関心が極めて低い。このような性向の学生像を思い浮かべてみると、すぐ手の届く周りの木々も見ず、山の姿も見えていない、という学生像が浮かび上がってくる。自分の目の前も、遠くの風景も見ようとしない学生は、自分自身を見失いやすい。

大学での4年間とは、勉学に励むもよし、ひたすら遊んでも、ただ無為に過ごすことですら将来の糧となる特別な時間である。本共同研究は「学生の適応」を問題提起として取り組んできたが、具体的な内容を書けないということは、何かをしたい、あるいは何もしたくない、そのどちらかもわからない学生が多いことが推測される。このような学生をどのようにして浚刺と

した若木に育むか、それが現在の大学に求められている課題であろう。

(1) 第4節は高橋が執筆を担当した。

参考文献

Smith, Adam, 1790, "The Theory of Moral Sentiments".

丸山真男、1961、『日本の思想』岩波書店。

P.ブルデュー、1990、石井洋二郎訳、『ディスタンクシオン—社会的判断力批判』藤原書店。

阿部謹也、1997、『「教養」とは何か』講談社。

内藤他、2005、「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究」名古屋産業大学論集 Vol.7。

5. 調査全般を通じて

本研究は、2005年9月と2006年4月のデータを中心とし、適応過程を分析したものである。過去の報告に一貫して見られた(i)心理系への強い関心、(ii)就職先として医療福祉系を目指す傾向、(iii)外国語、特に英語力に対する高い志向性、の3点について、それぞれ重要な示唆が得られている。

(i)の点について、同傾向が見られつつも、家庭環境・言語に関する関心が3年次前期において高まりを見せている。また、これら各分野の関連性を認める傾向は同時期に高くなり、とくに環境心理領域のゼミナールに所属する学生ほどその傾向が高い(第2節)。また同2節においては(ii)についても、同傾向が一貫しつつ、3年次前期には「サービス」業への関心の高まりと、就職に対する関心や不安が高まることが見出されており、後者は2年次から3年次への移行期という、学生にとって就職セミナー等就職を意識するイベントを経験しはじめる時期であることとの関連性が考察されている。

これら学年進行の時期と適応過程の関連性を中心的に論じているのは第1節である。2年次から3年次へという専門課程に移行することの刺激が、「環境への認識の多様化」を生じさせると考察された。しかし一方では過去の報告と第2節と同じく、人間環境系学生としての希望職種は「医療・教育」であることが見出されており、「(環境ではなく)人間環境に対する一体化された認識が欠如」していることから、「専門課程の刺激」により希望職種の多様化(医療・教育・福祉以外を思い描くことができる)までを導くには至っていないと考えられる。

(iii)については、英語科目の必修年次が終えると次第に関心が低下すること、また就職活動を通して再び英語への関心を高めることが見出された。こうした英語への関心・志向性を回復する傾向は、I期生よりもII期生の方が早く見せ始めており、先輩・後輩関係を通じた観察学習が存在すること

が考察される。

同じくI・II期生両学年を対象とした第3節においては、これまで報告されてきた大学内での友人関係を重要と感じる程度の時期間の高い相関が一貫して見られた。しかし、第4節と同様に両学年での違いも見られた。大学生生活全般に対する満足の度合いや重要度と友人関係重要度の関連性が異なる傾向である。I期生が2年次以降に大学生活と友人関係を分化させるのに対し、II期生ではある程度統合してゆく傾向を見せた。両学年を対象に今後も継続した検討を行う必要性がある。

最後に、これまでの報告にも見られたが、質問紙回収率の低下を防ぎうるよう調査の実施方法の改善を試みることに、本研究の趣旨に対する対象者の理解を深め、協力を得ることのできるよう努力を継続することは領域の課題である。

*本研究は名古屋産業大学・名古屋経営短期大学環境経営研究所より助成金を得ている。ここに記して謝意を表したい。